2017 年度聖霊降臨節第十一主日礼拝

「安心して生きる」マタイ 6:25~34

25 「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。26 空の鳥をよく見なさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、倉に納めもしない。だが、あなたがたの天の父は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりも価値あるものではないか。27 あなたがたのうちだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことができようか。

28 なぜ、衣服のことで思ひ悩むのか。野の花がどのように育つのか、注意して見なさい。働きもせず、紡ぎもしない。29 しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。30 今日は生えていて、明日は炉に投げ込まれる野の草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰の薄い者たちよ。31 だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思ひ悩むな。32 それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。33 何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。34 だから、明日のことまで思ひ悩むな。明日のことは明日自らが思ひ悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」

1. 導入

毎月、伝道礼拝の招待ハガキをつくっています。8月のハガキには「気楽に行こう」というテーマを掲げました。暑い夏にはプールで浮き輪に浮かぶように、肩の力を抜いて、イエスさまを信じてより頼んで生きていければ・・・そんなふうに思っ「気楽に行こう」のテーマとしました。

「気楽」というと、私は映画の「寅さん」を思い浮かべます。この世の義務から解き放たれて生活の事を思ひ煩う事もなく、自由に率直に優しく生き

ています。みんなが寅さんみたいに生きる事ができたら、日本はもっと楽しい社会になるのかもしれませんが。でも、寅さんの登場人物のように人間はいつも善人ではありません。映画の中の寅さんはファンタジー。いわば、おとぎ話の世界で現実ではありません。

しかし、実は、今日の聖書箇所、主イエスは、「寅さんのように、自由に気楽に、なおかつ、さくらのように堅実に生きていける秘訣」というのを私たちに教えてくださっています。それを一緒に見ていきましょう。

2. 不安

私たちリアルな人間が映画の中の寅さんのように自由な気持ちで生きられない原因は、「不安」ではないでしょうか。働かなければ、生活費は稼げない。家族も養えない。その日暮らしというわけにはいかない。健康の不安もあります。いつ病気になって働けなくなるかもしれない。また、周囲の評判も気になります。色々と言われて非難される事はつらいことです。私たちの心には色んな「かもしれない」でいっぱいになり不安になります。そうして少しでも不安を減らそうと、思い悩み心配します。

しかし、「それはすべての人ではない。中には経済的にも健康にも恵まれ、なんの心配事もなく生きていく人もいる」と仰る方もいるかもしれません。ですが、すべての人間が逃れられない不安があります。死に行く事です。人間の不安の究極は、「死」を迎えるときにあらわにされる・・・と言ってよいのではないのでしょうか。

私は昨年、お母さんを亡くしたばかりのある牧師の証を聞きました。その牧師の実家はクリスチャンホームではありません。お母さんもクリスチャンではありませんでした。「いよいよあぶない。覚悟してほしい」と言われて病院に駆け付けた時、母親は持ち直して話す事もできました。母親は怯えた表情で「わたしはどこに行くのだろうか」と息子である牧師に聞いたそうです。今、生きているこの「わたし」というものは、死んだら一体、どこに行くのだろうか、滅び去り消え去るのだろうか・・・牧師は、目の前の母親に、滅び

を前にして不安に怯える人の姿を見た・・とっていました。私たち人間は、どのように生きてたとしても、最後にはこの「死にいく不安」「滅びゆく不安」と向き合わなくてはならないのではないのでしょうか。

3. 神に信頼する安心

このように生きていく事の不安、死ぬ事の不安・・私たち人間は不安の中にいます。心配事の中にいます。そんな私たちが今日、聖書を通じて主イエスの言葉を聴きました。「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようか、思い悩むな。あなた方の天の父は、これらのものがみなあなた方に必要なことをご存知である」。

天の父とは、天地万物を創造された唯一の神のことです。聖書は、「この宇宙全体は自然の偶然にできたし、自分たちもすべての偶然でここに生まれてそうして死んでなくなっていく」というふうに世界を見ません。時が流れ出す前、永遠の昔に神は世界を創造しようと決意された。そして時が流れはじめ、全宇宙は創られた。神は特に人間を自分たちに似た姿に創られた。神を覚える事ができる「命の息」を与えた・・と、聖書の冒頭、創世記に書かれています。

ですが、人間は、神なしで、自分たちだけでやっていこうとします。神は全く正しい方です。ご自分を神としない人間の罪を見過ごしにはできません。しかし、一方で神は愛なるお方です。ご自分に似せて創った人間を深く深く愛しておられます。ご自分を神とできない人間を深く憐れまれるのです。「かわいそうに」と、はらわたが千切れるほど苦悶する神の姿を聖書は描きます。神は、ついにご自分の独り子、子なる神イエス・キリストを人間として、この世へとお送りになりました。そうして、神を神とできない人間の罪をこの独り子に全部負わせました。人間を裁き滅ぼす代わりに、ご自分と一心同体の神の御子イエス・キリストを十字架にかけて完全に見捨てました。父なる神は人間を捨て去る代わりに子なる神を捨てました。

子なる神は、私たち一人一人の為に、父なる神に見捨てられた深い深い絶望的な絶望を味わって死んでいかれました。そうして、私たち人間が神を神とできない罪を完全に償ってくださったのであります。

そうして、三日後に神はイエスさまをよみがえらせました。それは十字架で死んだ方が神の御子である事を私たち人間にはっきりと示すためです。神の御子イエス・キリストが私たちの罪のために十字架についてくださり、完全に死んでそして復活された・・・これを受け入れて信じた人々に、神の子となる霊が与えられる・・・と聖書は語ります。

神の子の霊を与えられたからと言って何か超能力が身につくとか空を飛べるとか空中浮遊できるとか、予知能力が身につくとかいう事は全くありません。できるようになるのは、イエスさまの父なる神さまを“私たちの天のお父さん”と親しく呼びかける事ができるようになることです。

しかし、この神さまをお父さんと呼ぶ事が出来るようになるのは、当たり前前的事ではありません。被造物一創られた者である私たち人間が、創造者一神さまを「天のお父さん」と呼べるようになるのです。私たちが考える以上の力を持ちます。何故なら、この私たちに与えられる神の子の霊は決して安易に与えられたものではありません。また、人間の気の持ちようなどという不確かなものでもありません。神の御子が犠牲となって私たちに与えられたもの、私たちを確実に新たに創りかえる力を持つものなのです。そうして新たに創りかえられた私たちは、すべてが可能である全知全能の神さまが自分をこの上もなく愛しており、私自身がこのうえもなく尊いと確信できます。つまり私たち人間の安心の基には、神の御子の十字架の愛があります。

4. コルベ神父

天の父なる神さまは、御子イエス・キリストを通じて信じた者たちに必要なものを全部必ず与えてくださる・・・と聖書は語ります。本当だろうか？・・・そう疑問に思う方もいらっしゃるかもしれません。長い歴史の中で悲惨な死

に方をしたクリスチャンはたくさんいたじゃないか？本当に天の父は、人間に必要なものを全部与えてくれるのだろうか？

そうです。確かに悲惨な死に方をしたクリスチャンはたくさんいます。飢え渴いて死んだ人も多くいます。第二次世界大戦の時、ナチス・ドイツがつくったアウシュビッツ収容所では餓死刑という処刑が行われていました。飲ませない、食べさせない・・・餓死室に閉じ込めて何日もかけて殺す。大変残酷な刑です。コルベ神父という神父は餓死刑に選ばれた男性の身代わりになって

死んでいきました。天の父なる神はコルベ神父に必要なものを与えていないじゃないか？と思われる方もいるでしょう。

しかし、やはりコルベ神父にも必要なものをお与えになったのです。食べるもの、飲むもの、着るもの・・・というのは、何も目に見えるものだけではないからです。父なる神さまを覚える霊の糧、霊の渴きを潤す水。キリストの教えを守る事で悪いものから守る霊の衣。それら目に見えないものも天の父なる神の愛のもとで生きるには欠く事のできないものです。それらをコルベ神父は天の父より与えられました。

それはどういう事かというと、コルベ神父は十字架上での神の御子のみ苦しみを想っていたに違いない・・・という事です。イエスさまは最後の最後に「私は渴く」と言い、「我が神、我が神、なぜ私をお見捨てになったのか」と絶望の叫び声を上げて息絶えました。深い深い、人間が降りる事のできない深い淵の底まで落ちて父なる神に見捨てられた、人となりたる神の御子。徹底的に苦しめられた神の御子が自分と共に苦しみの呻きをあげ、自分と共に、「我が神、我が神」と暗い独房の中で叫んでくださっている・・・コルベ神父はその事に豊かな慰めを見出し、この試練に耐えて神のみもとに召されたのではないのでしょうか。必要なものを父なる神はお与えになっていたのです。

コルベ神父のように最後まで根本的なところで安心して生きられるように・・・と、イエスさまは仰います。

5. 囚われるな

今日の聖書箇所での「思い悩む」という単語は、「心を虜にする」という意味があります。主イエスは、自分の心を心配でいっぱいにするな、心配に自分を明け渡すな・・・と仰っているのです。

何を飲もうか、何を食べようか、何を着ようか、そういう肉体的に、動物的に生きるために必要なものを得る事に心を虜にしてはいけない。自分を明け渡してはいけない。空を飛ぶ鳥を見てごらん、野に咲く花を見てごらん。鳥は何も食べ物を育てるための仕事をしていない。だけど、天の父は鳥を養うものを準備して下さる。野の花も自分を装う衣服をつくる事もしない。だけど、莫大な富を誇っていたソロモン王でさえかなわないほどの美しい衣をまとっている。鳥や花だってそのように必要なものを与えてくださるじゃないか。ましてや、神の御子の尊い命によって神を父と呼ぶようになったあなたたちに父なる神が必要なものを与えないはずはないじゃないか。だから安心して生きなさい。大丈夫、神さまはあなたを養い見守り、必要なものを与えてくれるから。それは何よりも主イエス・キリストの十字架と復活に表された私たち人間に対する父なる神の深い愛なのです。心配事に自分を明け渡さずに、父なる神の愛の徴である主イエスの十字架に心を向けなさい・・・と主イエスは招いておられます。

6. 春佐久神父

カトリックの東京教区に春佐久神父という方がいます。病気の方々によりそう活動を長く行っておられるそうです。私は彼の神学や説教に全面的に賛成というわけではありません。が、病にある人々によりそいつつ、紡ぎ出した言葉は輝いているなあ・・・と思うことがあります。

その春佐久神父の詩にこういう詩があります。「病気になったらどどん泣こ痛くて眠れないと言って泣き 手術がこわいと言って涙ぐみ 死にたくないよと言ってめそめそしよう 恥も外聞もいらぬ いつものやせ我慢や見えっぱりをすて かっこわるく涙

をこぼそう またとないチャンスをもたらったのだ 自分の弱さと思いあがりを知るチャンス。」

そしてこの詩は以下のように終わっています。「病気になったら安心して祈ろう 天にむかって思いのすべてをぶちまけ どうか助けてくださいと必死にすがり 深夜ことばを失ってひざまづこう この私を愛して生み慈しんで育て いつか御自分のもとへ呼んでくださるお方に すべてをゆだねて手を合わせよう またとないチャンスをもたらったのだ まことの親である神に出会えるチャンス。」

そしていつか病気が治っても治らなくても みんなみんな流した涙の分だけ優しくなり 甘えとわがままをこえて自由になり 感動と感謝によって大きくなり 友達を増やして豊かになり信じ続けて強くなり 祈りのうちに神の子になるだろう 病気になったらまたとないチャンス到来 病のときは恵みのとき」

私たちの人生には、「天の神様、天のお父様、なぜですか？ どうして私はこんなに苦しまなければならぬのですか？」という叫びをあげざるを得ない事があります。ですが、その嘆きや叫びは虚しく空に消えていくことはない、聞いてくださる方がいます。叫び声をあげて天の父なる神に助けを求め続ければ、「わたしはあなたを見捨てない」という声を必ず聴く事ができます。天地万物を創られたお方にも拘らず、ご自身以上に愛する御子を十字架にかけて見捨て、御子とご自身を究極の苦しみへと引渡してまで、私たちを救ってくださる天の父なる神がおられるのです。だから、生きる苦しみや不安、死への恐怖で心をいっぱいせず、不安や苦しみや恐怖に心を明け渡さずに、神さまに訴えればいい、祈りなさい。求めなさい・・・その事を通じて、私たちは神に喜ばれる良き者とされる、そして私たちは自由になり、豊かにされるのです。

7. 神の国、神の義を求めなさい

それが、「神の国、神の義を求めなさい」ということなのではないでしょうか。これは色々な意味を含む言葉ですが、最も基本的には「神さまがどういうお方か求め、神さまに従うことを第一になさい」という意味があります。神さまは全知全能の神、この全世界を創られた方、人間を創られた方。とうてい人間が理解できる方ではありません。しかし、この天の父なる神は、ご自身がどういう方であることを示してくださいました。神の御子イエス・キリストを通じてです。このイエス・キリストを知って信じる事こそ、神を知る事の最初になります。教会で礼拝をささげる事、毎日聖書を読み、祈り、賛美すること。それは、神さまの愛に応じて神さまを愛するという行為です。私たちが神さまを礼拝し、愛した時、不思議な事ですが、神さまはご自分がどういう方かを明らかにしてくださいます。

8. 求め続けなさい

そして、イエスさまが「神の国・神の義を求めなさい」と仰っている「求めさない」これを厳密に訳せば、「求め続けなさい」です。神さまは人間が完全に理解できるほど小さい存在ではありません。また、人生にはいろいろと思ってもみなかった事が起こります。時には神さまの愛がわからなくなる事もあります。だから、神さまがどういうお方か？ どういうお方かを求め続ける事が大切なのです。神さまは時間をかけて私たちにご自身を示してくださいます。

9. 今日一日を生きる

最後に主イエスは面白い事を言っています。「だから明日の事まで思い悩むな。明日の事は明日自らが思い悩む。その日の苦労はその日だけで十分である」。実はここには私たちが天の父なる神を信じて堅実に生きるコツが述べられているのです。

人間の明日—未来というのは、基本的に人間には分らないものです。未来を自由自在にコントロールできる人間はいません。人間がなんとかできるのは「今、この時」だけ。「今、この時」しか生きる事ができないのです。しかし、私たち人間というのは自分ではどうしようもない事をなんとかしようと色々と思い悩む時があります。明日—未来の事だけではありません。人生には実に自分の力ではどうしようもない事がたくさんあります。それが「明日の事」です。明日の事、自分ではどうしようもない事を何とかしようとして心をいっぱいにしてしまえば、却って自分がなすべき事が分からなくなってしまいます。「今日できる事、しなくてはならない事に力を尽くせない」それが心配事に囚われた人間の特徴ともいえます。

だからイエスさまは、そういう自分ではどうしようもない心配ごとに心をいっぱいにしてはいけない。まず、父なる神を求めなさい。自分の手を開き握りしめていた心配事を手放しなさい。自分がぎゅっと握りしめていた心配や思い悩みを手から離して神さまへと預けなさい・・・と主イエスは仰います。

そして、心配事から解放されて初めて、自分が為すべき事を力いっぱい果たす事ができるようになります。そうしてこそ、今日一日を神さまに導かれて堅実にしっかりと歩む事ができるのです。それは、まるで空いた手の平に神さまがおいてくださった恵みのような一日です。

10. 最後に

この世の日々を天の父なる神さまにより頼んで歩いていく。やがて、この肉体の命が尽きる時がすべての人にやってきます。最後の時、私たちは最も大きい未知の不安を経験します。死にいく・・・という事です。誰もこれを完全に経験した人はいない。みんな初めての経験です。

冒頭に牧師のお母さんが亡くなる間に「自分はどこに行くのだろう」と怯えていた・・・と申し上げました。息子である牧師は、母親の耳に唇を近づけて、「母さん、イエスさまを信じる？」と聞いたそうです。母親は小さくうなずいた。それを受けて牧師は言いました。「大丈夫だよ。母さんはこれから

イエスさまの所に行く。もうすぐ神さまに会えるよ」牧師はその場にもって
いたペットボトルで母親に洗礼を授けました。お母さんの不安の表情は消え
安らかな顔になり、意識は遠のいていきました。それからわずか三時間後、
お母さんは実に穏やかな表情で天に召されました。

息子である牧師は、神をほめたたえる「ハレルヤ」という言葉が口をつい
て出てきた・・・と言います。母親を失った寂しさと共に母親が今確かに天の
神様のもとにいる喜びに満たされた・・・と教えてくれました。彼は父なる神
を喜ぶ喜びに満ちあふれていたのだと思います。

主イエス・キリストの父なる神。このお方を天のお父さんと呼び祈り求め
る時、私たちは様々な心配ごとから解放されます。そうして本当に自分がで
きること、為すべき事のみ心を集めて、肩の力を抜いて気楽に安心して
堅実に生きていく事ができるのです。死の最後の一瞬までです。

そのような生きるすべを私は他に知りません。どうか、この神さまを信じ
て生きる安心にここに招かれたすべての方が生きるため、十字架と復活の主
への信仰が今日、また新たに与えられますように、切に切に祈る次第であり
ます。